金井学校の日々 —*Days of Kanai School*—

高橋　原

金井先生がご退官ということで，不肖の弟子として想い出話しなどを書いてみます。もっとも，金井先生はまだまだ想い出どころではありません。これを書いている現在（2003年11月）は，先生に審査していただかなければならない博士論文を間に合わせようと焦っている最中です（間に合うのでしょうか？）。指導教官としての金井先生には本当に迷惑のかけどおしなのですが，たまに会うと「どおー，元気ー？」といつも優しいので，ついついその笑顔に甘え続けで今日まで来てしまいました。

しかし，2000年の正月だったでしょうか，私が論文も書かずに自堕落な生活を送っているのを金井先生に叱責された…という夢で目が覚めたことがありました。金井先生はすでに私の超自我の一部となっているようですが，しかし総じて，穏やかな超自我であることは間違いないでしょう。

そもそも，私が宗教学科に進学したのは，金井先生の講義を聴講したことがきっかけでした。それはたぶん1990年くらいだったと思います。当時，駒場の教養学部でやはり自堕落な生活を送っていた私は，教育学部や印度哲学科などへの進学を考えつつ，フラフラしているうちに留年したりしていました。唯一ちゃんと出ていた金井先生の講義は，救済論と終末論，千年王国論と二王国論といった対立軸で，黒板のダイナミックな図とともに展開し，とにかくワクワクと楽しかった記憶があります。その頃，ユング心理学の入門書を読んだ私は，全人類の脳の奥にマンダラ図形がプリントされていると勘違いして，そこからまたどういう勘違いをしたのか，宗教学科を選んで本郷に進学しました。1992年春，これは素晴らしい選択でした。

当時の宗教学科のパンテオンは，金井先生，島薗先生，市川先生という神々の下に深澤助手，磯前助手という天使が控える強烈な構成でした（現在が強烈でないわけでは全くありませんが）。そこでまた私は，平田篤胤で卒論を書くという次なる勘違いをしかけたりしましたが，結局ユングを研究対象に選び（この選択は正しかったのでしょうか？），卒論，修論ともに金井先生の遠隔指導のおかげをもちまして自由に楽しく書き終えるこ

とができました。本郷の講義では，金井先生の宗教現象学がなんといっても印象に残っています。「いやー，暑いですね，えへへ」というようなイントロに油断していると，シャントピドラーソーセー，ゼーデルブローム，ファンデルレーウ，ペッタツォーニ等々，はじめて見る横文字を意味もわからず書き写すのに必死で，大学院の入試を受けるまで，それらが人名だということも知りませんでした。時々，先生が腰痛で休講になるのが実は楽しみでしたが，学生時代を通じて，もっとも忙しくペンを動かした講義でした。心地よい疲労感に浸りながら，「ああ，俺は今日も猛烈に宗教学を学んだのだ…」と黄昏時の本郷通りを池袋の下宿までバイクを飛ばしたのを思い出します。風に舞う銀杏の葉の一枚一枚が Religion という単語に見えた日々でした。

この稿を書くにあたって，たまにしか書かなくなっている日記をひもといてみると，蹉跌だらけの呆れた青春の中で，研究者になることを躊躇しながら修士論文の方針を説明する歯切れの悪い一人の大学院生がいました。金井先生は「きみ，しょうがないよ，研究者になるんだよ」と諭しています。あれから十年，彼はしょうがないから研究者になったのでしょうか…。